

# 山と博物館

第54巻 第10号 2009年10月25日

市立大町山岳博物館



儀重桜の枝と花

## 山桜が豊かに育つ日本に

草間 勉

京都に生れ育った私は、戦争が原因となり信州へ。野生桜と共に暮らして50年になる。二年草を播いて翌春花が咲いた日の喜びが、バラ栽培につながり、信州での自生の桜（バラ科）にとりつかれるきっかけとなった。

京都は千年の都。桜も桜先人も根が深くて広い。私の桜研究に支えと恵みを与えてくれた生まれ故郷に感謝。信州では日本アルプス北部、小谷・白馬・大町と乗鞍山麓から木曾とその周辺に縁が持てた。多雪と地形、標高差、地質などを条件として適応し自生した桜が混在分布しており、種間雑種をつくり出す条件がそろっている。そして、種間雑種というか、特別に美しい変種と実生による新種が育っている。白馬村北城嶺方堀田の儀重桜（村の天然記念物。オオヤマザクラの変種）、貞麟寺のエドヒガンの巨木とその実生から生じた百楽桜（田淵行男ゆかりのエドヒガン）、北小谷のオクチヨウジザクラの実生から育った姫福桜、最近育成できた森上桜（カスミ桜の実生）も丈夫で美しい。フジザクラの実生や変種、八重桜の新種なども育成できている。

このように変化する野生、自生種が混在分布する土地の利点がここにある。次々と新しい形質を持つ新種の生じる素質の生物資源利用のための保護と保全、普及を細々と続けてもう半世紀にもなった。山岳博物館でもそれらの植物分類学的な同定検証と、変化の秘密を裏付ける遺伝子レベルの研究への道をつけていただくことを心より願う。

（桜研究家）

# 餓鬼岳のライチョウ

宮野典夫

## はじめに

ライチョウについては大学や研究機関での調査が進み、少しずつその生態などがわかってきた。北アルプス室堂周辺での生息個体数は年により変動が見られること、北アルプスの北端に位置する小蓮華岳周辺ではハイマツ帯での生活は春から秋までで、冬は標高二〇〇メートルより下まで降りて生活していることなどがわかってきた。

ライチョウの基本的な生活史はこの山域でも変わらないが、季節的移動や生活環境の選択は積雪量などの気象や餌になる植物、地形によってローカル色があると考えられる。

## 餓鬼岳での過去の記録

餓鬼岳におけるライチョウの生息状況については大町市史第一巻自然環境(一九八四年)に羽田健三先生がナワバリ推定で三の基準と記している。四月から七月上旬はオスとメスがナワバリの中で生活し、このナワバリから飛び出すことはほとんどない。ライチョウの性比はオス一・五対メス一とされているので、餓鬼岳における三の基準ナワバリから算出されるライチョウの羽数は七、八羽と推定することができる。

## 餓鬼岳の概要

餓鬼岳は大天井岳から燕岳の山脈の末端に



砂浴び跡  
撮影：豊 厚子

今回の調査は登山道から調査員による目視によるもので、フンや砂浴び跡も生息状況を把握する上で貴重な情報として記録した。

## 二〇〇八年のライチョウ調査

あたり、西には高瀬ダム、北には七倉ダムと大町ダムが位置し、東は松本盆地の一部となっている。山容は急峻な地形が多く、唐沢岳の西北部には登攀の岩場の幕岩がある。南に延びる稜線はケンスリ・東沢乗越を経由して燕岳に至る。唐沢岳の標高は二六三二・四m、餓鬼岳は二六四七・二mである。ハイマツ帯は稜線上に帯状にみられ、面としての広がりはない。鞍部はシラビソやタケカンバとなっている。

また、足環やテレメータを装着して追跡する方法や、登山道以外に観察地点を設けた方法ではないので、精度は高くないが生息状況の基礎資料としては重要なものと考えられる。

## ①姿の確認

餓鬼岳とケンスリの中間地点でメスを三回確認し、採食・羽づくろい・排泄等の行動を観察した。フンは卵を抱いているときにみられる通常のフンの数倍はある大きなもので、新鮮なものであった。

三回ともメスは最後にハイマツの中にもぐり込む行動を示し、その位置は数メートルと離れていないところなので、同一個体でこの付近に巣があり、卵を温めていることが推測できた。今回の調査では営巣場所を確定する作業はしなかった。

七月二日、餓鬼岳小屋のスタッフの方が巣のあった付近で親子連れのライチョウを見



抱卵していたメス(2008年6月30日)  
撮影：山田 新

かけたそうなので、おそらくこの巣からヒナが生まれ育ったのだろう。

## ②声の確認

メスが抱卵している時期にはオスはナワバリを確保し、ナワバリを守るために見張りをしたり、隣のオスやあぶれたオスがナワバリ内に侵入したりしたときは追い出そうとする。また、薄暗くなる一九時三〇分過ぎにはオスはナワバリ内にあるいくつかのねぐらのひとつに飛んで向かい、早朝四時頃にはねぐらから飛び立つ。いずれも「ガツ、ガツ、ガー」と鳴いて行動をする。

調査中(二〇〇八年六月二十八日〜七月一日)の四日間の巡回中にオスの姿が目視できないばかりか、オスの鳴き声さえ聞くことができなかった。朝夕は調査員が稜線上に一〇〜二〇メートルおきに並び、ねぐらに行き来する時に発するオスの鳴き声に耳をソバ立てたが、聞くことができなかった。ナワバリ争いの習性を活用し、カセットテープレコーダーでオスの鳴き声を流してみたが、どの場所でも反応がなかった。

## ③フンの分布



メスの行動



フンの分布

### 二〇〇九年のライチョウ調査

二〇〇八年と同様の方法で六月二七日、二九日に調査を行った。  
 ①姿・声の確認  
 この年は姿も声もまったく確認することができなかった。  
 ②フンの分布

フンも発見することができなかった。

### 二年間の調査から考えられること

#### ①ナワバリの推定

羽田先生が示したのは三の基準ナワバリであったが、実際には一(二〇〇八年)と二(二〇〇九年)であった。

二〇〇八年の調査では餓鬼岳から餓鬼のコブの間で砂あび跡、グリーンシーズンの小腸糞があり、この付近にもう二ツガイが形成される可能性はある。また、ケンズリ付近は登山道が稜線から離れているため双眼鏡による目視調査を行なったが、二六四四mのピーク付近は営巣が可能な環境であり、ケンズリの下部の登山道では砂あび跡を発見している。ケンズリより南のハイマツは樹高があり面積も少なく、稜線近くまでシラビソやダケカンバの植生が見られ、ナワバリを形成するには適していないと感ぜられる。

#### ②オスの所在

巣があった近くでヒナを確認している。この巣にあったのは有精卵と考えられる。したがって少なくとも産卵時の六月中旬にはオスはいたことになる。

二〇〇八年にオスが確認できなかった理由のひとつとして交尾後捕食あるいは死亡した可能性がある。もうひとつには交尾後に他の地域へ移動したことが考えられる。ただし、ナワバリを持つ時期のオスは非常に土地執着性が強く移動は考えにくい。あぶれたオスの気配がなくナワバリを見張る必要がなくなり安定した状態になったときにナワバリの保持意欲が薄れる傾向になることも推測できる。また、調査不足もいめない。

#### ③推定ナワバリと実際の差

二〇〇九年の調査の結果をみて、餓鬼岳にライチョウがいなくなったと結論づけることはできない。冒頭に述べた生息数の変動、季節移動を参考に仮説を述べる。

二〇〇九年は餓鬼岳から南に足を伸ばし燕岳を経由して為衛門吊岩付近まで観察をしているが、営巣の証明ができる抱卵中の大きなフンが餓鬼岳寄りで見えたのは燕岳付近である。この位置から餓鬼岳までの距離は直線で約四キロメートルであり、餓鬼岳の個体は燕岳周辺の地域個体群のひとつと考えられる。



ナワバリの推定

### 指標

今後、もう少しばらばら調査をしないとつきりしたことは述べられないが、餓鬼岳・燕岳の個体群内の数変動が餓鬼岳のナワバリ形成に関与しているならば、温暖化とライチョウの関係などを解明するにも餓鬼岳のナワバリはひとつの指標になるのではないかと考えられる。

### おわりに

この調査は山岳博物館が調査員を募集し、ボランティアで活動していただいた成果を示したものです。雨の中、また早朝から暗くなるまで献身的に観察していただいた古神子敏行さん、佐藤仁昭さん、下村基さん、玉田伸宏さん、土橋道長さん、野呂重信さん、豊厚子さんに謝意を表します。また、現地で心配慮いただいた餓鬼小屋の伊東瑛子さんはじめスタッフの方々にお礼申しあげます。

(市立大町山岳博物館 副館長)



冬期中と思われるフン 撮影：佐藤 仁昭

メスの抱卵中の大きなフンは繁殖をしていることを証明する貴重な情報源であるが、通常のフンからもライチョウの生活を考察することができる。

フンを割って見たときの色や内容物でいつものフンかある程度推測することができる。冬期中のフンは茶系の色で堅い繊維が詰まっている。グリーンシーズンで直近のものは緑系で柔らかみのあるものである。

フンの状況を見ると冬季のフンは広く分布しているが、グリーンシーズンの糞と思われるものは餓鬼岳周辺に限られている。

# 儀重桜の由来

## 由来

この桜は、昭和五十一年、白馬村の大山桜を調査に来られた渡辺光太郎先生を案内した際に、大山桜の変種として確認され、その後昭和五十二年、村の天然記念物に指定された。儀重桜（白馬村北城嶺方堀田）の名称は、所有者の矢口儀重氏の名からつけられている。樹高約二十mで長い枝を下にひろげる見事な巨木で、普通種に比べて一・五倍もの大輪花をつける。

昭和五十六年、下枝が豪雪で折れてしまっただが、版画家の徳力富吉郎先生にその様子を作品にしていただけだ。先生は、昭和五十九年春、八十六歳のとき現場にスケッチに来られ、その年の十一月三日に完成した作品を届けてくれた。折れた大枝も、先生が宿泊されているホテルに儀重氏が持参して下さり、ホテルでスケッチされ作品にしていただけだ。先生も「いい仕事できてよかった。」と喜んで下さった。

## 草間勉



「儀重桜」  
花数：少  
花梗：長  
花弁：大  
枝：細長

## 徳力富吉郎先生のこと

平成十二年六月、九十八歳で逝去された京都の版画家で、京都の文化を現代に導く貢献は絶大だった。茶道人として、また日本画家としても活躍され、大津絵の研究と普及の仕事から、世界的に脚光を浴びている江戸中期の京都の異色画家、伊藤若沖の顕賞にも力をいれられた。浮世絵師、広重の足跡を自分の足で歩き、自分流の版画作品もつくられた。

## 徳力富吉郎作木版の「儀重桜三点」



左：64×24cm 右上：36.5×22.5cm 下36.5×22.5cm

信州での作品も多く、大町にも昭和十年代に対山館に来られ、窓から見える鹿島槍ヶ岳と当時の板屋根を作品にされている。足立源一郎や小林和作と共に見た山麓の風景や町並みも版画作品になっている。先生は、遠来の客をことのほか喜ん



大山桜の「標準的枝」の写真  
花弁が小さく弱いと本葉が開花と同時に葉が落ちる。

## 大山桜の天然記念物

多雪地である大町以北の北アルプスと戸隠、北信地方は、野生種の自生群落が広く、その種類も多い。その中でもこの地帯で最も目立つ桜は、大山桜だといってよい。花色と花の大きさ、数、花色の品格と色彩に幅がある。大山桜は、北海道ではエゾヤマザクラと呼ばれており、北の方まで分布しよく目にする。本州では北部を中心に、日本海側では中国地方まで分布している。谷間や山麓北斜面、山の中腹以下に自生し、標高でいうと北アルプス山麓では五百メートルから千メートルあたりに多い。雪の多い地帯で夏は涼しく乾燥しすぎないことが、実生自生分布の条件になる。土質的には腐植土の水はけがよい場所がよく育つ。成木になり根が深く伸びると自生地でもよく育ち、自分の経験では京都の北部でもよく育っている。新潟・富山・岐阜から鳥取大山、広島の高地にも分布しているという。鳥取大山のものと北海道網走の両種を比べると、鳥取大山の樹は枝が太くよく伸び、網走のものは葉の出方が早く、タカネザクラの生リズムと共通したところがある。

## 大山桜の花の美にまつわって

いつでも会って下さった。広い意味ではそのとおりであったが、私を「京都の美術学校の後輩」ともいつて下さった。京風というものには皆かかわられていたようで、北大路魯山人や本阿弥光悦、棟方志功とのつながりについて大事にされていた。



国の天然記念物「野中桜」  
花弁の幅が広く大きいのが特徴。  
国の天然記念物に指定されている。花弁径4.5～5.0mm。

極楽寺（新潟県東蒲原郡阿賀町両郷甲）の野中桜（大山桜の変種）は、極楽寺桜とも呼ばれており、国の天然記念物に指定されている。古木で一度枯れた株の根元から数本が株立して五、八メートル位に達している。特別に大きい花ということが指定の理由になっているが、白馬の儀重桜の花も、松本市奈川の入山にある御殿桜といわれているものも大差はない。野中桜は花弁が広いだけ巻き乱れが生じているように思える。

一方、入山の御殿桜と白馬の儀重桜は花弁が丈夫で散るまで花形がくずれず、特に儀重桜は、長枝が細くのび花数が少な目で咲きぶりに優美さを感じる。出葉も少し遅出で花形や色を邪魔せず、枝から少し離れた空間で咲く点が絶品であり、徳力先生は、この桜の美しさを的確に見ぬいて作品に「信濃銘木儀重」と記された。

（桜研究者）

山と博物館 第54巻 第10号  
発行 二〇〇九年十月二十五日発行  
長野県大町市大町八〇五六一  
市立大町山岳博物館  
TEL 0266-3111011  
FAX 0266-3111111  
E-mail: smp@city.tamaki.nagano.jp  
URL: http://www.city.tamaki.nagano.jp/smp/ku  
印刷 大系タイムス株式会社  
定価 年額一、五〇〇円（送料含む） 切手不可  
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七二二九九三